

追試研究

—評価懸念と利他行動の関係に社会規範が与える影響—

Replication Study:

The Effect of Social Norms on the Relation between Reputation Concern and Altruistic Behavior

清野幸歩

Yukiho KIYONO

(日本女子大学大学院 人間社会研究科心理学専攻修士1年)

要約

近年、利他行動を促進する要因の1つとして、他者からの評価への懸念が注目されている。この関連性を検討した Kawamura & Kusumi (2018b) では、利他行動が規範的である（利他行動が周囲から期待される）状況では、評価懸念が高い人ほど利他行動を行うと回答しやすい傾向がある一方、規範的ではない状況においては、評価懸念の強いほど利他行動が抑制される、という交互作用のパターンが見られた。この結果は、評価懸念の効果が状況によって異なることを示唆する点で興味深いものであるが、規範的な場面における評価懸念と利他行動の正の関連は、統計的有意には至っていない。この理由は、利他行動のスコアが天井効果を示したためであるかもしれない。そこで本研究では、Kawamura & Kusumi (2018b) の方法を修正して、追試を行った。その結果、利他行動のスコアに天井効果は認められなかったものの、先行研究で示された状況の規範性と評価懸念の間の交互作用は統計的に有意ではなかった。

[Abstract]

Recently, reputation concerns have gained attention as a factor promoting altruistic behavior. Kawamura and Kusumi (2018b) tested the hypothesis that whether reputation concerns promote altruistic behavior depends on the context. They found that individual differences in rejection avoidance were positively associated with altruism in situations where prosocial norm was present, but negatively associated when such a norm was not salient. However, the positive association between rejection avoidance and altruism in the prosocial context did not reach conventional levels of statistical significance. This may be due to ceiling effects in the altruism scores. To address this, the current study replicated Kawamura and Kusumi (2018b) with a modified method. The results indicated that ceiling effects in altruism scores were not observed, but the interaction effects between normative conditions and reputation concerns were not statistically significant.

問題と目的

我々の社会生活では、多少の自己犠牲を払ってでも他者に手を差し伸べる光景がしばしば見られる。自分が何らかの問題に直面した時に周囲の他者が助けてもらった、あるいは困っていそう

な他者を見かけた時に手助けをしたといった経験は、誰しも一度はあるのではないだろうか。こうした利他行動は、自己の利益よりも他者の利益を優先しようとする考え方や動機である利他主義に基づくものと考えられ(小田他, 2013), その促進・抑制要因について、これまで様々な観点から研究がなされてきた。

近年の研究では、利他行動を促進する要因の1つとして、他者からの評価が注目されている。例えばRomano et al.(2017)は、複数の経済ゲームを用いた研究から、人は自分の行動が他者に共有される状況、すなわち評判の手がかりとなることが予測される状況においては、ゲームでの相互作用相手が内集団成員か外集団成員かにかかわらず、利他行動(寄付)が高まることを実証している。また、より現実在即した場面を想定した水師・西尾(2017)のシナリオ実験では、特定の内集団成員から肯定的評価を得ることへの関心が高いほど、その相手に対して知覚している心理的距離や規範的影響の程度にかかわらず、内集団ひいきとしての利他行動意図(内集団に属する商品に対する購入意図)が大きくなることが示されている。加えて、「見つめる目」の存在は他者から見られている感覚を生じさせると考えられるが、この「見つめる目」の効果は、特に慢性的に公的自己意識が強い人、つまり自分が他者からどうみられているかという意識が強い人において、より利他行動(寄付金額)を高める要因になることが報告されている(Pfattheicher & Keller, 2015)。このような研究からは、他者からの評価やそれに対する懸念は、個人の利他行動を促進させる一要因であることが示唆される。

しかしながら、利他行動は、常に他者からの高い評価の獲得につながるとは限らない。例えば、Pleasant & Barclay(2018)は、公共財ゲームを用いた研究から、過剰な利他性を示す人は、次に示すような過程を踏むことにより他者から否定的に評価されうること示した。まず、公共財ゲームにおいて高レベルの協力度を示す参加者は、他者から肯定的に評価されやすくなるため、それより低レベルの協力度を示す参加者にとっては、自分の他者評価を相対的に低下させうる存在として認識される。こうした理由から、低レベル協力者は、自身の利他性が低いと評価されることによって被る排斥を避けるために、高レベル協力者に対して罰を与えるという行動をとり、過剰な利他行動を抑圧しようとする傾向にあることが示された。また、利他行動を行うことが行為者の利益に結びつく場面(チャリティー番組の仕事を引き受ける場面)を想定した上で、参加者にその行動の動機を推測させたシナリオ実験(針原, 2015)においても、たとえ利他行動の動機が明示されない条件であっても、利己的動機明示条件と同様、個人の利己的動機(「自分のイメージをよくしたいため」)が推測され、偽善者判断される傾向が示された。こうした研究結果に基づけば、利他行動を行うことで他者に否定的に評価されうると予測される場面では、他者評価を懸念し利他行動を意図的に抑制する可能性が考えられる。

このように、他者評価と利他行動は単純な促進関係にあるのではなく、むしろ、人々は状況に応じて他者評価を考慮に入れながら、どのような行動が望ましいかを主体的に選択・判断しているといえる。そのため、他者評価と利他行動の関連を理解するためには、こうした観点からの検討が必要であろう。こうした観点からの研究としてKawamuraら(Kawamura & Kusumi, 2018a, b)が挙げられる。

まずKawamura & Kusumi(2018a)は、他者評価に関わる心理傾向である賞賛獲得欲求と拒否回避欲求に注目して、これら2種類の心理傾向の個人差と利他行動意志の関連について検討してい

る。その結果、賞賛獲得欲求が高い人ほど利他行動意志が高い一方で、拒否回避欲求が高い人ほど利他行動の意志が低いことを示した。そして拒否回避欲求と利他行動意志に負の関連が見られた理由を Kawamura & Kusumi (2018b) は、社会規範にあると推測した。つまり、個人が行う利他行動が、大多数の人々が実際に取る行動とは異なると予測される場合、それは社会一般の規範から逸脱した行動として、他者から否定的な評価を受ける可能性が高まる。よって、拒否回避欲求の高い人は、友人集団と行動を共にしている状況において、友人集団のメンバーは利他行動を行っていない場合、すなわち、自身が利他行動を行うことが集団内の規範から逸脱しうるとみなされる場合には、友人から否定的評価を受ける可能性により目を向けやすいために利他行動を抑制しうるという予測したのである。この予測は、社会規範を操作したオンライン調査によって検討された。具体的には、利他行動を行うことが内集団の規範に沿うとみなされる場面（向規範的場面）とそのようにみなされない場面（非向規範的場面）という2つのシナリオのいずれかを成人参加者に提示し、その場面において利他行動を行うかどうかについて回答を求めることで、社会規範が評価懸念と利他行動意志の関係に与える影響が検討された。

階層的重回帰分析の結果、賞賛獲得欲求と規範条件の交互作用は有意ではなかったが、拒否回避欲求と規範条件との交互作用が有意であった。つまり、向規範的場面では、拒否回避欲求と利他行動意志には関連が見られなかったが、非向規範的場面ではそれが高いほど利他行動意志が低まるというパターンがみられた。これは Kawamura & Kusumi (2018a) の結果を再現するものであった。

一方で、拒否回避欲求と利他行動意志の関連は社会規範によって調整されるとした Kawamura & Kusumi (2018b) の予測を踏まえれば、内集団が利他行動をとっている向規範的場面においては、拒否回避欲求が高い人ほど利他行動意志が高まるという関連が見られることが予測された。しかしながら、Kawamura & Kusumi (2018b) の単純傾斜分析では、向規範的場面においてその傾向はみられたものの、拒否回避欲求と利他行動意志の相関関係は有意ではなかった。これに関して、向規範的場面では利他行動の平均評定値が高く示されており、したがって相関が見られなかった理由として天井効果が生じていた可能性が考えられている。この点を踏まえて Kawamura & Kusumi (2018b) では、利他行動意志を目的変数とするトービット回帰分析で対処しており、次のような結果を得ている。まず、拒否回避欲求と規範条件の交互作用が有意であった。また、非向規範的場面では拒否回避欲求と利他行動は負に相関し、向規範的場面ではそれらの相関はみられなかった。このように、トービットモデルで得られた推定結果は線形モデルの分析結果とほぼ同様であり、よって、社会規範条件の調整効果を検証するためにはさらなる検討が必要であろう。

本研究の目的

本研究では Kawamura & Kusumi (2018b) の概念的追試を行うことを目的とした。具体的には、利他行動意志の測度でみられた天井効果が生じないようにシナリオを修正した上で、Kawamura & Kusumi (2018b) と同様の結果が得られるかを検討した。この天井効果は、用いられたシナリオにおいて設定された被援助者が老人男性であったことによると考えられる。一般的に、老人には身体機能が低下して周囲の助けの必要性が高い属性があると直感的に認識されているために、シナリオを提示された際に、助けないという選択肢との葛藤がそもそも生じにくかった可能性がある

る。そのため本研究では、シナリオ上の被援助者を、援助を要するという属性をもたないと考えられる青年男性へ変更した。その上で、向規範的場面と非向規範的場面を設定して、これらにおける利他行動意志と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連を検討した。具体的には、Kawamura & Kusumi(2018b)に基づき、以下の予測を立てた。

まず、場面と拒否回避欲求の交互作用が見られると予測した。つまり、拒否回避欲求が高い人ほど、向規範的場面では利他行動意志が高くなる一方で、非向規範的場面では利他行動意志が低くなるという交互作用のパターンがみられるとした。なお、場面と賞賛獲得欲求の交互作用は観察されないと予測した。これは、賞賛獲得欲求の高い人においては、内集団から否定的評価を受ける可能性に関心が向きにくく、場面にかかわらず利他行動意志は高く維持されやすいと考えられるためである。加えて、Kawamura & Kusumi(2018b)にて、向規範的場面において拒否回避欲求と利他行動意志の相関関係がみられなかったことが天井効果によるものであるとするならば、本研究では、同場面において拒否回避欲求と利他行動意志に正の関連がみられる可能性がある。

方法

参加者

2024年7月6日～7日に、クラウドソーシングサービスを利用したオンライン調査を実施した。「Yahoo! クラウドソーシング」の登録者が閲覧できるWebサイト上に、「普段の物事の考え方と想像力についてのアンケート」というタイトルで募集した。研究への参加は任意であること、回答は匿名で行われること、回答を途中でやめられること、回答を完了することで報酬(電子決済で使用可能な30円相当のポイント)が得られることを事前に明示し、これらに同意する場合のみ、調査へ参加するよう求めた。

サンプルサイズは、十分な検出力のもとで追試を行うため、Kawamura & Kusumi(2018b) ($n = 274$)の倍を目安に設定し、少なくとも600名分の回答が分析に使用できるように募集をかけ、630名からの回答を得た。またKawamura & Kusumi(2018b)が青年期(20～29歳)の回答者を集めていたため、本研究でも回答対象者を18～40歳と設定した。1つの操作チェック項目(調査において提示されたシナリオは、向規範的場面と非向規範的場面のどちらであったかを確認するための項目)に適切な回答ができなかった123名、性別項目に「回答しない」と回答した10名、研究参加の同意チェックに「同意しない」と回答した1名の参加者をデータから除外した。最終的に向規範的条件に259名(平均年齢32.62歳, $SD = 6.23$, 男性133名, 女性126名)、非規範的条件に229名(平均年齢31.82歳, $SD = 6.63$, 男性113名, 女性116名)の合計488名のデータを分析に使用した。

質問票

参加者は、自身のインターネット端末から調査に参加した。その上で、研究参加に関する簡単な説明を読んだ後、研究参加同意項目に回答した。同意者はその後、次に示すいくつかの質問に回答した。

まず参加者を向規範的場面と非向規範的場面にランダムに割り振るために、生年月日の最後の数字は偶数と奇数のうちどちらであるか回答を求めた。最後の数字が偶数(0, 2, 4, 6, 8)であれば向規範的場面を、奇数(1, 3, 5, 7, 9)であれば非向規範的場面を呈示した。

年齢・性別 参加者の属性を把握するため、年齢と性別について回答を求めた。性別は、「男

性]、「女性」、「回答しない」という選択肢の中からいずれかを選択させた。また、年齢は、18から40までの選択肢の中からいずれかを選択させた。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 2種類の評価懸念の程度を測定するために、Kawamura & Kusumi (2018b)と同じく賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島他, 2003)を用いた。この尺度は、賞賛獲得欲求尺度9項目 (“人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい”など)と拒否回避欲求尺度9項目 (“意見を言うとき、みんなから反対されないかと気になる”など)から成り、“まったく当てはまらない (1)”から“強く当てはまる (5)”までの5件法で回答を求めるものだった。

シナリオ 本研究では、Kawamura & Kusumi (2018b)の研究で用いられたシナリオをもとに、天井効果が生じることのないよう微修正を行った。以下に挙げるシナリオは、本研究のオンライン調査で用いた向規範場面のシナリオである。なお、シナリオ中の下線部は、元のシナリオに修正を加えた箇所である。

駅の待合室で3, 4人の友人とおしゃべりをしていると想像してください。あなたは、近くに1人の青年男性が落とし物を探していることに気づきました。あなたの友達もそれに気づき、落とし物を探している青年男性を助けようとしています。

非向規範的場面では、後半を「あなたの友達もそれに気づきましたが、落とし物を探している青年男性を助けようとする人は誰もいませんでした」に変更した。

利他行動 上記シナリオを呈示した後に、利他行動の意志を測定した。参加者自身がシナリオの場面に居合わせたとしたら、落とし物を探している青年男性を助けようとするかと尋ね、“間違いなく助けない (1)”から“間違いなく助ける (7)”までの7件法で回答を求めた。

チェック項目 利他行動の意志の測定後、参加者がシナリオ内容を理解していたかを確認するための質問を行った。具体的には、操作に関する文章が除外されたシナリオの前半部分のみを呈示し、参加者がその続きの文章として何を讀んだかについて回答を求めた。回答方式は、向規範的場面の文章、非向規範的場面の文章、そして“わからない・覚えていない”の3つの内から1つ選択するものだった。

結果

記述統計

まず、向規範的場面のシナリオを呈示した条件 (向規範条件)と非向規範的場面のシナリオを呈示した条件 (非向規範条件)のそれぞれにおいて記述統計量を算出した (Table1)。なお、2つの評価懸念の指標としては、各尺度の平均評定値を用いた。 α 係数は、賞賛獲得欲求 ($\alpha = 0.92$)、拒否回避欲求 ($\alpha = 0.90$)のいずれの尺度においても0.9以上の値が示され、信頼性に問題はなかった。向規範条件では、賞賛獲得欲求の平均評定値は $M = 2.48 (SD = 0.88)$ 、拒否回避欲求は $M = 3.50 (SD = 0.81)$ であった。非向規範条件では、賞賛獲得欲求の平均評定値が $M = 2.40 (SD = 0.86)$ 、拒否回避欲求は $M = 3.33 (SD = 0.91)$ であった。加えて、利他行動の意志の平均評定値は、向規範条件で

は $M = 5.46 (SD = 1.26)$ 、非向規範条件では $M = 4.87 (SD = 1.55)$ であった。したがって、いずれの条件においても利他行動の意志が満点に近い得点で回答される傾向は Kawamura & Kusumi (2018b) に比べ弱かった。

また向規範条件では、賞賛獲得欲求は利他行動の意志と正の相関を示した ($r = .145, p < .05$)。拒否回避欲求は利他行動の意志と無相関であった ($r = .073, p = .240$)。なお、拒否回避欲求は、性別 (0 = 女性, 1 = 男性) と負の相関を示した ($r = -.179, p < .01$)。非向規範条件では、賞賛獲得欲求は利他行動の意志と正の相関を示した ($r = .210, p < .01$)。拒否回避欲求は利他行動の意志と無相関であった ($r = .097, p = .145$)。なお、賞賛獲得欲求は性別と正の相関を示し ($r = .212, p < .01$)、年齢は性別と正の相関を示した ($r = .134, p < .05$)。

Table 1. 規範条件ごとの賞賛獲得・拒否回避欲求、利他行動の意志に関する平均値と標準偏差および各変数間の相関

尺度	向規範的 ($n = 259$)		非向規範的 ($n = 229$)		α	1	2	3	4	5
	M	SD	M	SD						
1. 賞賛獲得欲求	2.48	0.88	2.40	0.86	0.92	-	.043	-.109	.000	.145
2. 拒否回避欲求	3.50	0.81	3.33	0.91	0.90	.082	-	-.014	-.179	.073
3. 年齢	32.62	6.23	31.82	6.63		-.084	-.023	-	.043	.149
4. 性別	1.49	0.50	1.51	0.50		.212	-.099	.134	-	-.025
5. 利他行動意志	5.46	1.26	4.87	1.55		.210	.097	.079	-.004	-

* 上三角行列に向規範条件 ($n = 259$)、下三角行列に非向規範条件 ($n = 229$) の相関係数を示した。

階層的重回帰分析

利他行動の意志を従属変数とした階層的重回帰分析を行った。Step 1では年齢、性別を投入し、Step2では規範条件 (0.5 = 向規範的, -0.5 = 非向規範的)、2種類の評価懸念 (賞賛獲得欲求・拒否回避欲求) を投入した。Step3では規範条件と各評価懸念の交互作用項を投入した。この結果を Table2 に示す。またいずれの Step においても、各独立変数の VIF は 1.1 未満であり、多重共線性の問題は生じていなかったと考えられる。

Step1 から Step 2 での分散説明率の増分は有意であり ($\Delta R^2 = .079, F(3, 482) = 14.09, p < .001$)、規範条件の効果が正で ($\beta = .182, p < .001$)、つまり参加者は向規範的な場面において、利他行動の意志をより高く評定していた。また、賞賛獲得欲求 ($\beta = .186, p < .001$) が利他行動の高さを正の方向で予測したが、拒否回避欲求 ($\beta = .071, p = .109$) の効果は有意ではなかった。さらに、年齢の効果が正で ($\beta = .131, p = .003$)、つまり年齢の高い参加者ほど利他行動の意志をより高く評定していた。Step 3 では 2 つの評価懸念それぞれと規範条件との交互作用項を追加したものの、分散説明率は Step 2 に比べて増加しておらず ($\Delta R^2 = .003, F(2, 480) = .774, p = .462$)、いずれの交互作用項も有意でなかった (賞賛獲得欲求と規範条件: $\beta = -.052, p = .232$, 拒否回避欲求と規範条件: $\beta = -.012, p = .791$)。

Table 2. 利他行動意志を目的変数とした重回帰分析の結果

	Step1					Step2					Step3				
	B	95%CI	β	p	VIF	B	95%CI	β	p	VIF	B	95%CI	β	p	VIF
切片	4.327	[3.673, 4.980]		<.001		4.287	[3.655, 4.920]		<.001		4.300	[3.673, 4.980]		<.001	
性別 ^a	-.059	[-.313, .196]	-.021	.651	1.008	-.096	[-.346, .153]	-.034	.447	1.042	-.115	[-.366, .136]	-.040	.368	1.057
年齢	.028	[.008, .047]	.123	.007	1.008	.029	[.010, .049]	.131	.003	1.023	.029	[.010, .049]	.132	.003	1.023
規範条件 ^b						.260	[.137, .383]	.182	<.001	1.017	.260	[.137, .383]	.181	<.001	1.017
賞賛獲得欲求						.266	[.142, .390]	.186	<.001	1.029	.269	[.144, .393]	.187	<.001	1.031
拒否回避欲求						.101	[-.023, .226]	.071	.109	1.036	.096	[-.029, .222]	.067	.131	1.052
賞賛獲得×規範条件											-.075	[-.199, .048]	-.052	.232	1.017
拒否回避×規範条件											-.017	[-.140, .107]	-.012	.791	1.019
ΔR^2															.003
R^2	.011					.079***					.084				.084

Notes ***<.001. CI=Bの信頼区間

^a女性=0, 男性=1

^b向規範0.5, 非規範-0.5

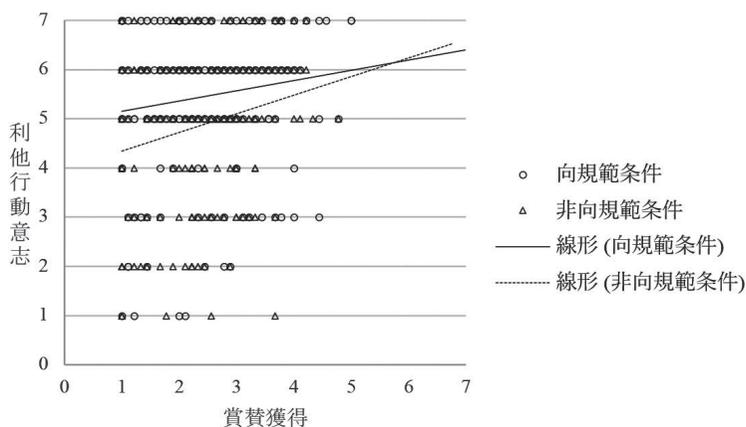


Figure 1. 向規範条件と非向規範条件における賞賛獲得欲求と利他行動意志との関連

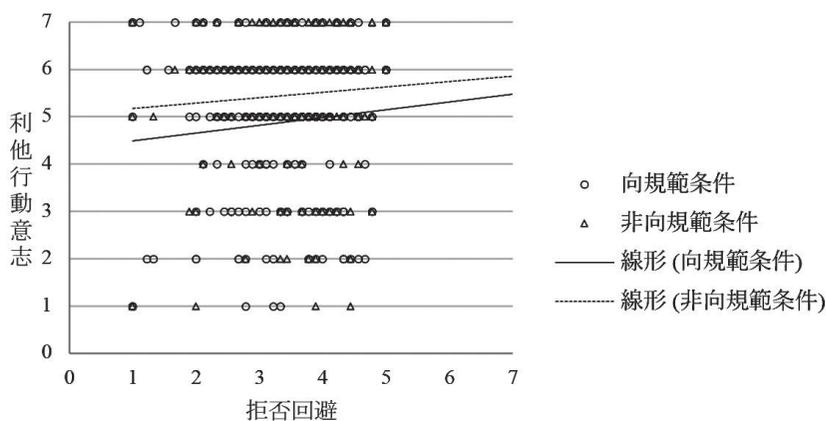


Figure 2. 向規範条件と非向規範条件における拒否回避欲求と利他行動意志との関連

考察

本研究では、Kawamura & Kusumi (2018b)の方法を用いて、規範条件と拒否回避欲求の間に交互作用が見られるだろうという仮説を検証した。具体的には、拒否回避欲求が高い人ほど、向規範条件では利他行動の意志が高くなる一方で、非向規範条件ではそれが低くなるという交互作用のパターンがみられると予測した。また、賞賛獲得欲求は規範条件にかかわらず利他行動の意志と正の関連がみられると予測した。その結果、まず予測と一致して、賞賛獲得欲求は利他行動の意志を正方向で説明していた。しかしながら、規範条件と拒否回避欲求の間の交互作用は統計的に有意ではなかった。

賞賛獲得欲求について 賞賛獲得欲求は、本研究においても利他性の高さとの関連を示した。賞賛獲得欲求の高い人とは、言い換えれば、他者からの肯定的な評価の獲得を目標とした行動を行う傾向が高い人のことである。利他行動は、一般的に肯定的評価が見返りとして期待される行為であり、賞賛獲得欲求の高い人はこうした見返りを志向したうえでの利他性が高まりやすいために関連が見られたと考えられる。補足すると、この関連はKawamura & Kusumi (2018b)でも観察されていたものである。

交互作用について 一方で、規範条件と拒否回避欲求の間の交互作用は、予測に反して有意ではなかった。拒否回避欲求が高い人は、集団内の規範に同調する傾向が高いという性質を踏まえれば、規範場面によって利他行動の意志の高さは異なると考えられる。つまり、拒否回避欲求の高い人は、自分の行動が集団内の規範から逸脱することによる集団からの否定的評価を回避するために、集団に同調した行動をとりやすくなる。その結果、向規範場面では内集団メンバーが利他行動を起こしているために個人の利他行動の意志も高くなる一方で、非向規範場面では内集団メンバーが利他行動を起こさないために、個人は自分だけ違う行動を取ることで集団から拒否されるのを恐れて、利他行動の意志が低くなると考えられる。こうした理由から、本研究では、規範条件と拒否回避欲求の間に交互作用が見られると予測を立てた。

しかしながら、本研究においてそのような結果が見られなかった理由に、以下の2つが可能性として挙げられる。

まず、シナリオ上の援助対象者を青年男性に変更したことで、援助場面から参加者が知覚する要支援度の高さが低下した可能性である。次に、シナリオ上の援助場面が規範性(内集団から個人に知覚される、同調を促す強制力)の存在を十分に知覚させるものではなかった可能性である。規範性が知覚されない例として、向規範条件が「内集団メンバーが助けようとしているため、援助の手は足りている」と捉えられた可能性や、非規範条件が「内集団メンバーが助けようとしていないが、個人が援助行動を行うかは本人の自由である」と捉えられた可能性が挙げられる。

加えて、本研究では向規範条件における利他行動変数は $M = 5.46$ ($SD = 1.26$)であり、Kawamura & Kusumi (2018b)での $M = 6.28$ ($SD = 0.89$)から若干低下したため天井効果は認められなかったといえるが、本研究で期待された拒否回避欲求と利他行動の意志の正の関連はなお見られなかった。以上の点を踏まえて今後の課題を補足するとすれば、個人の利他行動の意志が、要支援度の知覚と規範性の知覚のどちらによって高まったあるいは低まったものであるかを区別するために、要支援度の知覚に関する質問項目と併せて、規範性の知覚の大きさに関する質問項目も追加する必要があるだろう。

規範条件について また、規範条件については、向規範条件（内集団のメンバーが利他行動を行う場合）において個人はより利他行動の意志が高まる傾向が見られた。この関連は Kawamura & Kusumi (2018b) でも同様に観察されていたものである。先述のとおり、利他行動は一般的に肯定的評価が見返りとして期待される望ましい行為であるため、周囲が利他的であれば、個人の利他性もそれに応じて一層高くなると考えられる。こうした理由により、シナリオの援助対象者を老人から青年へ変更した本研究においてもこれらの関連が見られたのであろう。

本研究の限界点 本研究の限界点としては、まず、Kawamura & Kusumi (2018b) で用いられた4つのシナリオのうち1つのみを用いた点が挙げられる。次に、Kawamura & Kusumi (2018b) で統制変数として用いられた対人反応性指標を本研究では用いていない点が挙げられ、よって評価懸念と利他行動の関連に共感性が交絡している可能性も考えられる。

以上をまとめると、本研究で示された結果は、Kawamura & Kusumi (2018b) の傾向と概ね一致するものであったと考えられる一方で規範条件と評価懸念の交互作用はみられなかった。よって、上に示したいくつかの点を修正したうえで、評価懸念と利他性の関連をより詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

- 針原 素子 (2015). 向社会的行動が「偽善」と判断される時：推測された動機が及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集, 79, 284. https://doi.org/10.4992/pacjpa.79.0_3ev-021
- Kawamura, Y., & Kusumi, T. (2018a). Relationships between two types of reputational concern and altruistic behavior in daily life. *Personality and Individual Differences*, 129, 19–24. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2017.09.003>
- Kawamura, Y., & Kusumi, T. (2018b). The relationship between rejection avoidance and altruism is moderated by social norms. *Personality and Individual Differences*, 129, 24–27. <https://doi.org/10.1016/j.paid.2018.02.038>
- 小島 弥生・太田 恵子・菅原 健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11(2), 86–98. https://doi.org/10.2132/jjpspp.11.2_86
- 小田 亮・大めぐみ・丹羽 雄輝・五百部 裕・清成 透子・武田 美亜・平石 界 (2013). 対象別利他行動尺度の作成と妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 84(1), 28–36. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.84.28>
- Pfaffheicher, S., & Keller, J. (2015). The watching eyes phenomenon: The role of a sense of being seen and public self-awareness. *European Journal of Social Psychology*, 45(5), 560–566. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2122>
- Pleasant, A., & Barclay, P. (2018). Why hate the good guy? Antisocial punishment of high cooperators is greater when people compete to be chosen. *Psychological Science*, 29(6), 868–876. <https://doi.org/10.1177/0956797617752642>
- Romano, A., Balliet, D., & Wu, J. (2017). Unbounded indirect reciprocity: Is reputation-based cooperation bounded by group membership? *Journal of Experimental Social Psychology*, 71, 59–67. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2017.02.008>
- 水師 裕・西尾 チズル (2017). 内集団ひいきとしての購買行動に間接互恵性が与える影響 プロモーション・マーケティング研究, 10, 7–24. https://doi.org/10.32260/promotion.10.0_7